

INTERVIEW

Professor, Doctor.
Akira DEGUCHIFaculty of Law and Literature
Shimane University

出口 顯 氏

でぐち・あきら

島根大学 法文学部社会文化学科 教授

1957年島根県出身。79年筑波大学第二学群比較文化学類卒業。84年東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士退学。84年島根大学法文学部助手、同大学同学部助教授を経て00年より現職。

専門は文化人類学、構造人類学研究。著書に「名前のアルケオロジー」（紀伊国屋書店、95年）、「誕生のジェネオロジー」（世界思想社、99年）、「臓器は『商品』か」（講談社、01年）、「レヴィ=ストロース斜め読み」（青弓社、03年）など多数。

——二項対立のポイントを入れ替えるだけで、今の社会に反映したものがあってもいいですね

◆そうですね。10年くらい前から体外受精等の不妊治療の研究を始めました。当時は治療について不自然だという人たちがいましたが、当事者からすれば自然な形では難しいので少しサポートが必要だったと。どちらにしても両者は自然らしさにすぐこだわっていることを感じました。体外受精の成功率は3割と低く、失敗するのが当たり前と考えたほうがいいわけです。何度行なってもできないというのが体外受精

——無限に広がっていくのですね

◆単純に一つの結論に結びつかないというところがあります。それをきちんと見据えることをレヴィ=ストロースの思想から考えていくのが私の一つの作業です。先が見えないという不安な結論に頼ることが往々にしてありますが、そうならないための知的訓練を積むということですね。その際、100年、200年のタイムスパンではなく、1万年ぐらいの幅で時間を捉え、そこから今という社会、世界を振り返って何か言えることがあるのではないかと。それをうまく伝えることができればいいと思っています。

【聞き手 情宣部・藤井】

時間を越え星雲のぶとく存在する神話を読む

彼の構造分析によると、物事がどうやって『適正な距離』を置いて、今あるような形に配置されているのかを語るものが神話だと言っています。太陽と地球が近すぎて灼熱の地獄になることもなく、遠すぎて永遠の冬が支配することもなく、ほどよい距離にあつて生命の存在が可能であることを語るのが神話だといふのです。

——構造分析について

◆簡単に言えば、『二項対立』というのをまず見つけていくということです。七夕伝説を例に挙げると、男対女、畑を耕す対機を織る、天上の織姫対地上の牽牛というような対立項を話の中から抽出します。また、ここで語られる適正な距離とは、「一年に一度だけ」会うことなのです。毎年それを繰り返す。繰り返しの象徴として機織が挙げられています。別系統の七夕伝説を見てみると、古代中国では神に捧げる生贄が牛であ

ったことから、牽牛の傍らにいる牛は離れ離れになつた二人を近づけようとする役割として登場しています。対立する同士の間には存在する『媒介』を見ていくことが2番目の方法です。

続いて、話がどのように『変形』されていくかを見ていきます。「猿智入り」①という話ですが、これは言ってみれば男と女の問がとも離れていきますね。結婚できていませんし、末娘は嫁ぐと言いつつながら実は嫁いでいない。これはサルという人間ではないもの、民俗学の中では異類と言

いますが、異類と人間の婚姻です。次に人間同士の婚姻を見てみると「絵姿女房」②という話があります。この場合は、接近しすぎて最終的にはうまくいきません。そこで、幸せな結末に至るような形態の一例として「田螺息子」③があります。これは、田螺であるけれど人間という両義的な存在です。長者の娘は完全な人間ですので、変形という操作を持ち込むと、人間と中途半端な人間との結婚は、ほどよい距離ができてうまくいくということになります。さらにひっくり返して考えてみると、「雪女」や「鶴の恩返し」のように人間の姿をしている化物（異類）と人間はうまくいかないというストーリーになるのです。

このように、次々と話が繋がられていくわけですから、結論にはたどり着けません。池に石を投げると波紋が広がっていく様子、その姿を明らかにするのが構造分析ということになります。

——無限に広がっていくのですね

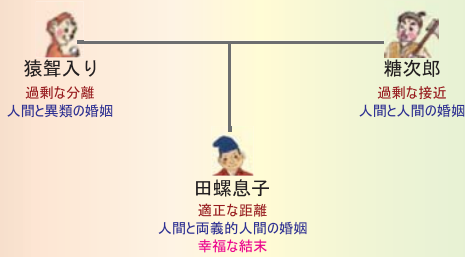
◆単純に一つの結論に結びつかないというところがあります。それをきちんと見据えることをレヴィ=ストロースの思想から考えていくのが私の一つの作業です。先が見えないという不安な結論に頼ることが往々にしてありますが、そうならないための知的訓練を積むということですね。その際、100年、200年のタイムスパンではなく、1万年ぐらいの幅で時間を捉え、そこから今という社会、世界を振り返って何か言えることがあるのではないかと。それをうまく伝えることができればいいと思っています。

大学人
話題の組員

——専門について

◆世界の諸民族の社会、文化を研究する学問を文化人類学と言います。私はその中でも文化人類学史とくに構造主義と呼ばれる理論の再検討をしています。60年代から70年代に構造主義という思想が流行し、その中心にいたレヴィ=ストロース

神話同士の関係図



①「猿智入り」 爺が娘を3人持っている。畑を手伝った一人嫁にやると猿にいう。猿は手伝い、約束の実行を求めめる。上二人の娘は断り、末娘が猿の嫁になるという。娘は水瓶と簪を持って嫁に行く。途中の堤で娘はわざと簪を落とす。猿は水瓶を背負ったままそれを拾いに水に入り溺れて死んでしまう。

②「絵姿女房」 糖次郎という貧しい男が長者の美しい娘を嫁に貰った。女房を愛してそばを離れず働かないので田畑が荒れてしまった。女房は自分の姿を絵に描いて糖次郎に与えた。あるとき王子の手に入り「この絵の女を妻に迎えたい」と言つて、夫婦の仲を引き裂く。妻は宮中を抜け出して戻るが、糖次郎は嘆き死んだ後だったので自分も身を投げて死んでしまった。

③「田螺息子」 爺と婆が子供が欲しくて村の神に詣る。神社の清水で田螺を拾い、螺太郎と名づけて大事に育てる。長者の家に奉公に行った螺太郎は爺と婆が好物の麦こがしを貰うが人に取られはしないか心配する。そこで長者が麦こがしを盗む者はお前の嫁にしようという。夜中、長者の一人娘の口に麦こがしを塗り、嫁に貰うことに成功する。嫁とともに神社へ行き、下駄で螺太郎を踏み潰したらきれいな若者になって、二人は一生幸せに暮らした。



△写真1、右より：出口氏、中国からの養女と母親（アイスランド人）

だとしたら、ある社会では何もしないのにできてしまったと語る神話もあるわけです。神話的な考え方を非論理的だと言つて否定する上にできた医学技術というのが、皮肉にもかつての神話の裏返しをしたような状況を作り出しているのではないかなと思つたことがあります。

もう一つ、国際養子縁組ということがあります。ハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリーが人種の違う子供を養子として育てていますね。また、ソフトバンクの携帯電話の宣伝に見られるように、父親がイヌはともかく、お兄さんは黒人です。私たち日本人にとっては不自然に見えてしまいがちですが、スウェーデンやノルウェーであれば韓国や中国からの養子を多く迎えていますので、「国際養子だ」で済む話です。（写真1）

構造分析的に考えるならば、血の繋がりをとても重視するというパターンとブラジルのカデ・フエオ族のように堕胎や嬰兒殺しを繰り返し、他の部族から奪ってきた子供を養育し再生産を保つていたという血の繋がりを嫌うパターンの二項対立的な社会があります。これらを両極端に置いてみたときに、中間に来るようなものとして、国際養子を行なっている社会というように、いろいろなバリエーションの一つとして私たちの人間関係や家族関係というのを見ていくことができるのではないかと思うのです。様々な家族の形態が出てきたとしても、すぐにおかしいとか異様だと決めつけずに受け入れていけるようなしなやかさを持つ必要があるというのが構造分析の教えなのです。